

## ハワイにて

深津行徳

時ならぬ駐車の列に野次馬根性を刺激されて、わたしも車を止めた。ここは合衆国ハワイ州オアフ島の東岸、有名な「ホワイト」サンデイ・ビーチの少し手前、回遊してきたザトウクジラを遠望できるポイントの一つではあるが、それは数ヶ月先のことである。

集まっていたのは、ハワイイ語で「ハレオ」とよばれる人々であった。サングラスに隠された彼らの視線を追うと、沖には数艇のカヌーが見える。どうやらカヌー競争が行われているようである。今日は、オアフ島の東北にあるカネオへの町の骨董屋で見つけた資料を買いに行くつもりであった。それは一九五二年の日付が印刷されたレストランのメニューのだが、背表紙に、ハワイイを「発見」したキャプテン・クックをはじめとする「ハレオ」を、のちのカメハメハ大王がカヌーで迎え入れ歓待する様子が描かれている。エキゾチックなこの絵はおおいに評判をとり、現在まで続く観光地・保養地としてのハワイイ・イメージの形成に重要な役割を果たした。この絵にも描かれているカヌーはハワイイの人々にとって重要な交通手段であったが、いまは、おもに「ハレオ」のアクティビティとして存在するだけである。なにかの

ハワイにて（深津）

縁であろう。陽気なかれらは、ソフトドリンクとスナックで盛り上がる。わたしもさっそく「よく焼けたチキン」という愛称をもらった。

「ハレオ」とは、肌の色が白いアングロサクソン系の人々をさすハワイ語であるが、原義は「系図を持たない人」であるという。文字を使用しなかったハワイの人々は、自分たちの来歴を詩に託し、リズムにのせあるいは所作を加えて、特別な時間に特別な装いで伝承した。現代社会の維持に必須である文字の習得は、二百年弱前のハワイ社会では必要ではなかったのである。わたしの専攻する古代東アジアでは、中国との交渉のなかで文字を受容しやがて文字使用を前提とした社会が営まれたが、口承の確実性と口頭伝達の重要性も指摘されているところである。とくに前近代社会の歴史研究においては、文字史料が、なぜ、どこに、どのように記録されたものなのか、史料そのものに対する考察を怠ってはならない。また、文字史料の価値を相対化することも必要であろう。

沖ではまだカヌー競争が続いているようだが、「ハレオ」たちの視線はすでにそこにはない。わたしも、英語できるとほしい話題を出し尽くしたので、車へと退散することとした。

二〇〇四年八月二九日

（本学文学部教授）